

ソグド王離宮を掘る

—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2024年度発掘調査—

寺村 裕史 国立民族学博物館・准教授

宇野 隆夫 帝塚山大学・客員教授

村上 智見 東北芸術工科大学・准教授

ベグマトフ・アリシエル ヘルリン・ブランデンブルク科学アカデミー・研究員、サマルカンド国立大学考古学科・准教授

ベルディムロドフ・アムリディン サマルカンド考古学研究所・上席研究員

ボゴモロフ・ゲンナディー ウズベキスタン科学アカデミー民族考古学研究センター・上席研究員

サンディボエフ・アリシエル サマルカンド考古学研究所・研究員

末森 薫 国立民族学博物館・准教授

押鐘 浩之 国立民族学博物館・外来研究員

モハメド・エルガマル エジプト観光・考古省・調査官

Excavations at Kafir-Kala in Uzbekistan in 2024: The Residential Area (Shahrستان) of the Sogdian Royal Residence

TERAMURA, Hirofumi Associate Professor, National Museum of Ethnology

UNO, Takao Visiting Professor, Tezukayama University

MURAKAMI, Tomomi Associate Professor, Tohoku University of Art & Design

BEGMATOV, Alisher Research Scholar, Berlin-Brandenburg Academy of Sciences. Associate Professor, Samarkand State University, Department of Archaeology

BERDIMURODOV, Amridin Senior Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

BOGOMOLOV, Gennadiy Senior Research Fellow, Uzbekistan Academy of Science, National Center for Archaeology

SANDIBOEV, Alisher Research Fellow, Samarkand Archaeological Institute

SUEMORI, Kaoru Associate Professor, National Museum of Ethnology

OSHIKANE, Hiroyuki Visiting Researcher, National Museum of Ethnology

MOHAMED, Elgammal Inspector of Antiquities, Egyptian Ministry of Tourism and Antiquities

1. はじめに

日本・ウズベキスタン共同発掘調査隊は、イスラーム以前かつ初期の中央アジアの歴史と文化、およびシルクロード交流の実態解明を目的として、2013年度よりウズベキスタン共和国サマルカンド市のカフィル・カラ遺跡において継続的に発掘調査を実施してきた。シャフリスタン地区においては、北寄り最も高い箇所(西側中央)に約10m×10mの調査区(Tr. N5、**図1**)を設定のうえ掘り下げたところ、そのトレンチにおいて厚さ最大2.5mの建物壁を東西南北にそれぞれ確認し、南北10.77m、東西10.15mのほぼ正方形の大型の部屋(大ホール)の詳細が明らかになった。この大ホールは、宮殿区域の一部である可能性が検証されている(Begmatovほか 2024)。さらにその調査区を南側に拡張する形での発掘を継続し、隣接する建物遺構の全容把握に向けて調査を行なったところ、大

ホールから南に続く通路の先に二つの部屋が確認できた。そこで、大ホールをRoom 1、新たに検出した部屋をそれぞれRoom 2、Room 3と呼称することとした。本年度は、昨年に引き続き、それらの部屋の大きさや、他の部屋との関係性(接続状況)を確認することを主な目的として発掘調査を行なった。

2. シャフリスタン地区 Tr. N5 の継続調査

昨年度検出したRoom 2は、大ホールに入る手前の部屋として控えの間的な役割を担ったものと考えられるが、南東方向にさらに広がる可能性が高いことが判明している(寺村ほか 2023)。そこで建物全体で考えた際に建物そのものへの出入り口(玄関)が、この部屋の先に存在するのかどうかなどを確認するために、2024年度はトレンチを南東側に拡大し、Room 2がどこまで続くのかを明らかにするため掘り進めることとなった(**図2**)。



図1 カフィル・カラ遺跡 2024 年度発掘区
[WorldView-3 衛星 includes © DigitalGlobe, Inc., NTT DATA Corporation]

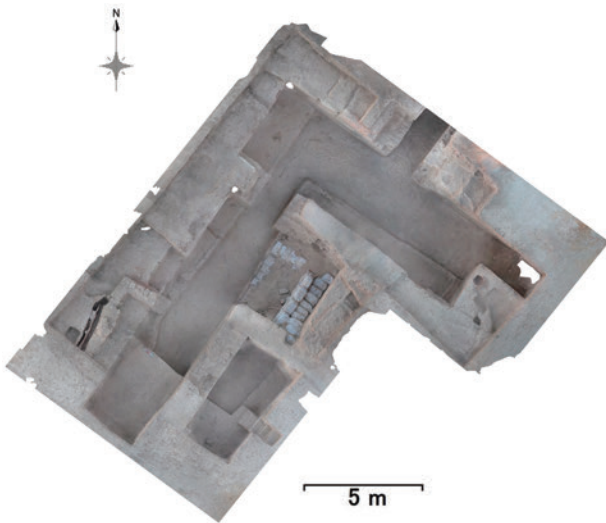


図2 Tr. N5 [Room 2、Room 3] 平面図(SfM-MVS により作成した遺構オルソ画像)

そこで Room 2 の東側の堆積土を掘っていったところ、3m ほど東のところに漆喰で塗り固めた部屋の壁を検出した(図3)。ただし、南側(図3 右側)の幅約 2m が漆喰塗りの壁であり、北側(図3 左側)には約 1.5m 幅の堆積土が検出されたため、さらにこの奥まで通路が続くことが判明した。この通路手前までの部屋(Room 2)の大きさは、短辺約 3.5m、長辺約 12m の長方形となる。

その後、通路内の埋土を取り除いていったが、2m ほど東側へ掘っても、漆喰塗りの壁や出入り口のような



図3 Room 2 の東壁断面。南側(写真右側)に幅約 2m の壁が検出され、北側(写真左側)には約 1.5m 幅の通路がこの奥まで続くことが判明した。

な遺構は検出できず、本年度は作業を一旦終了することとなった。通路がこの先どこまで続くのかについては、次年度以降の調査課題である。

Room 3 についても、南壁が攪乱と水平の堆積土になっており(図4)、この部屋が南側にどこまで広がるのかが昨年度の課題であった。そこで、この南壁を崩すかたちで南西方向に掘り進めたが、こちらも漆喰塗りの壁などは検出できず、作業は一旦終了とした。現状では、Room 3 は L 字状の部屋となっており、正確な形や部屋の大きさについては、次年度以降の調査成果を待ちたいと考えている。



図4 Room 3の南壁断面。下部は比較的水平的な堆積層であるが、上部は攪乱を受けている様子がよく分かる。



図5 調査区の南西隅で見つかった排水溝(あるいは何らかの導水施設)

また、時期は新しくなるが、部屋の西側上部の清掃作業中に、被熱し灰などで埋まった溝を検出し、貨幣と金属片が数点見つかった(図5)。また、溝の横では、壊れた土器片も発見された。上部の遺構に伴う排水溝か、あるいは何らかの導水施設の可能性もあるが、機能や用途などの詳細は今後の検討課題である。これらも含め、Room 3と連続する部屋の関係性を探るためにも、南西方向へのさらなる発掘範囲の拡張が必要になる可能性がある。そうした今後の検討を容易にするために、本年度調査終了時点での遺構全体のDEM(数値標高モデル)を作成したものが図6である。標高の違いが色の濃淡で表されているため、遺構の関係性を考えるにあたって同一平面(レベル)上の壁や床面が把握しやすくなり、部屋の形状もはっきりと確認できる。次年度の調査計画に役立てたいと考えている。

3. 大ホール建物群の設計復元

カフィル・カラ遺跡の大ホール建物群(Room 1・2・3)の設計について、造営尺の視点から復元を試みた。従来のこの地区の調査において、日干しレンガの規格を唐尺(1尺:0.296m、1歩:5尺)で定めていたことが明らかになっていたので、建物規格も唐尺で設

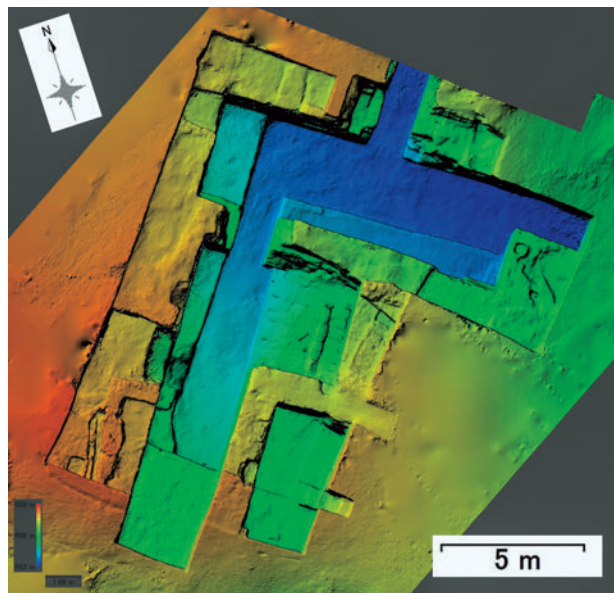


図6 2024年度調査における調査区全体のDEM(数値標高モデル)。Room 2から東側に通路が伸びている状況や、Room 3が南西方向に広がっている状況がよく分かる。

計したことを予想できた。

まず大ホールの日干しレンガが露出した中央の位置で、南北長を測ると10.45mであった。目地を考慮すると、レンガ面で35唐尺(7歩)・10.36mの設計であったと推定したい。これに対して、南壁東西長は

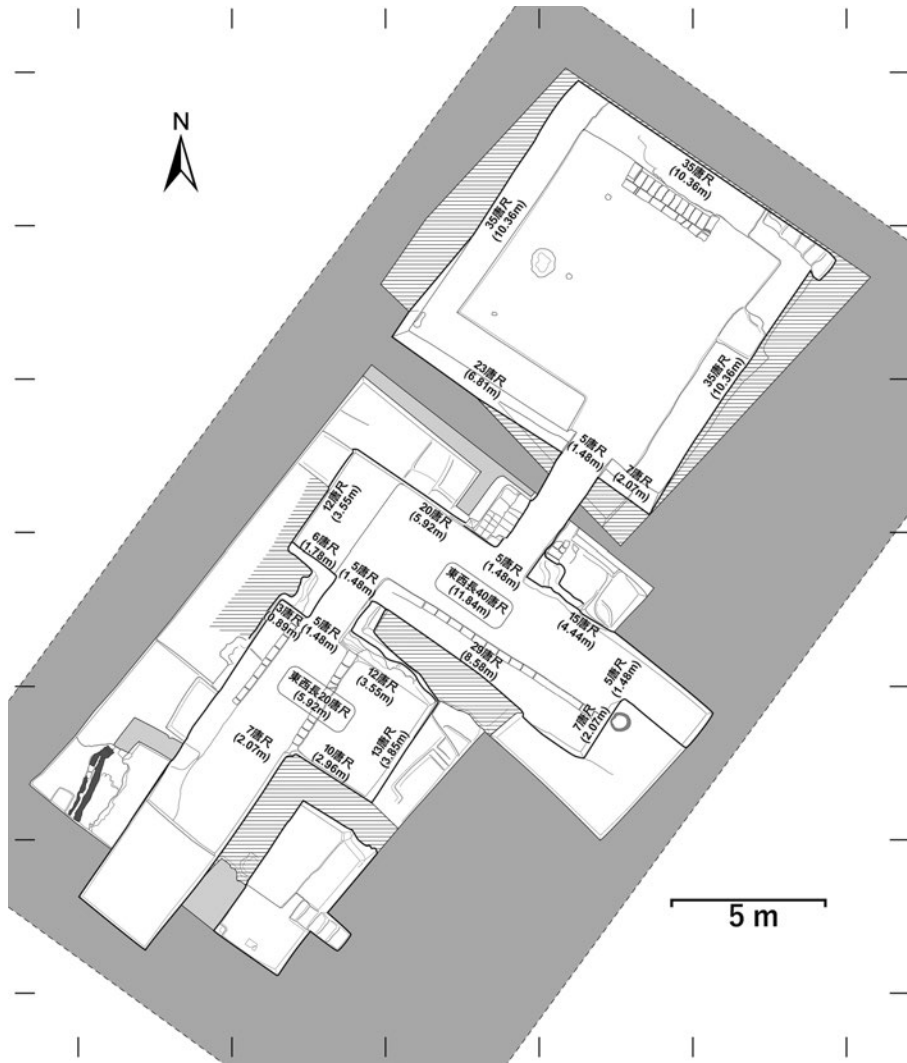


図7 大ホール建物群の設計復元

表1 カフィル・カラ大ホール建物群の設計復元

部屋	測定位置	計測点の状態	計測長	唐尺	推定尺	復元規格
room 1	中央南北長	レンガ面とレンガ面	10.45m	35.3	35唐尺	10.36m
room 1	南壁東西長	壁土面とレンガ面	10.15m	34.3	35唐尺	10.36m
room 1	南側通路幅	壁土面とレンガ面	1.52m	5.1	5唐尺	1.48m
room 1	南側通路長	レンガ面とレンガ面	4.13m	14	14唐尺	4.14m
room 2	北壁東西長	壁土面と壁土面	11.58m	39.1	40唐尺	11.84m
room 2	西壁南北長	壁土面と壁土面	3.57m	12.1	12唐尺	3.55m
room 2	東壁南北長	壁土面と壁土面	3.61m	12.2	12唐尺	3.55m
room 2	南壁東西長	壁土面と壁土面	11.55m	39	40唐尺	11.84m
room 3	北面東西幅	壁土面と壁土面	6.01m	20.3	20唐尺	5.92m
room 3	東壁南北長	壁土面と壁土面	3.83m	12.9	13唐尺	3.85m

10.15 m とやや短いですが、西側が壁土面（壁画面）での計測であり、南北長と同様にレンガ面で 35 唐尺（7 歩）・10.36 m の設計であった可能性が高いであろう（図7、表1）。

その他の部分のサイズも唐尺でよく割り切れるが、

大ホール東西長と南北長が 35 唐尺（7 歩）、Room 2 東西長が 40 唐尺（8 歩）、Room 3 東西長が 20 唐尺（4 歩）と、重要な部分については、歩の単位を考慮して設計していたことに注意しておきたい。

これらのことから、本建物群の設計は日干しレンガ

面を基準に行なったものと推定している。日干しレンガのサイズを唐尺で決めているので、建築従事者は唐尺の知識や物差しがなくても、真っ直ぐな棒にそって決められた枚数の日干しレンガを積むことによって、容易に施工できたであろう。

このように本建物群は、唐尺によって厳密に設計・施工していた。そしてその設計者は、1尺の長さだけでなく、唐の尺と歩からなる長さの単位の原理を、正しく理解していたであろうことは、特に重視したいところである。

4. その他の調査成果

本年度の調査では、出土遺物の量と種類は決して多くはないが、貨幣、土器片や金属片、動物骨などが出土している。動物骨に関しては、DNA分析を実施するために、本年度出土のものではないが以前の調査時に出土した動物骨からFTAカード〔QIAcard FTA Classic〕を用いてサンプルを採集した。サンプル対象として選んだ動物骨は、カフィル・カラから出土した5頭分のヤギ亜科(Caprinae)に属する寛骨である。これらを選んだ理由は、寛骨の形態だけからヒツジとヤギを見分けるのが難しいという問題があり、そこでDNA分析の結果から形態学的基準を見つけれないかという挑戦のためである。分析の結果はまだ出ていないが、もしうまくDNAが抽出できれば、当時の動物種の多様性を調べるためにも貴重な分析になると期待される。

また、SfM-MVSによる写真測量だけでなく、3Dレーザースキャナを用いてTr. N5の発掘調査区およびシタデル上面の点群データも取得している。遺構のデジタルによる記録として、今後どのような活用方法があるかも検討していきたい。

5. 結び

本年度は、Room 2と3の遺構の確認を主たる目的として、昨年度からの継続で調査を進めてきた。結果としては、Room 2の大きさはほぼ確定したが、東側通路の先にどのような構造物が存在するのかまでは確認できなかった。Room 3も、南側にさらに広がる可能性が分かり、今後の調査の成果が期待される。Tr. N5における大ホール(Room 1)に伴う部屋の構造にはまだ不明な部分があり、次年度以降の調査によって建物群の全体像をさらに明らかにしていきたい。

*本発掘調査は、JSPS 科研費、JP23K25400(23H00703)、JP23K17523、JP24H00101の助成を受けた成果の一部である。

■参考文献

- ・村上智見、寺村裕史、宇野隆夫、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエル 2022「ソグド王離宮を掘る—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2021年度発掘調査—」『第29回西アジア発掘調査報告会報告集』23-27頁 日本西アジア考古学会
- ・宇野隆夫、寺村裕史、村上智見、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエル 2023「ソグド王離宮を掘る—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2022年度発掘調査—」『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』98-102頁 日本西アジア考古学会。
- ・寺村裕史、宇野隆夫、村上智見、ベグマトフ・アリシエル、ベルディムロドフ・アムリディン、ボゴモロフ・ゲンナディー、サンディボエフ・アリシエル、末森薫、押鐘浩之 2023「ソグド王離宮を掘る—ウズベキスタン共和国カフィル・カラ遺跡(シャフリスタン地区)2023年度発掘調査—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』117-121頁 日本西アジア考古学会。
- ・Begmatov A. Teramura H., Decruyenaere D., Mashkour M., Mir-Makhamad B., Spengler R., Murakami T., Sandiboev A., Uno T. 2024. The Grand Hall of Kafir-kala: An Observation of Archaeological Finds, Botanical and Zoological Evidence, *History and Archaeology of Turan* 6, 194-206.